

## 音韻について

## 【音韻】

「おふでさき」は、それが執筆された明治2年（第一号）から明治15年（第十七号）という時代性と、大和国の庄屋敷村周辺という地域性が色濃く反映された書であり、その音韻体系には方言的要素が多分に含まれている。また、その叙述スタイルは五七五七七という31の音節から成る和歌体であり、語の内容だけでなくその響きやリズムに応じて音律の調整が細かく行われている。そこで、「国語学」では「おふでさき」の音韻について以下のように①方言としての音韻変化と、②韻律調節上の音韻変化（音節転換）の二つの側面から考察されている。（なおここでは事例は少数に留める）。

## ①方言としての音韻変化

## 〈母音相互間の変化〉

- ・ a → o: 「しといいくならば」（慕い）
- ・ i → e: 「せへいゝばい」（精一杯）、「ぞんめゑ」（存命）
- ・ i → u: 「あしく」（悪しき）
- ・ u → i: 「うらみなよ」（恨みなよ）、「かないまい」（叶ふまい）
- ・ u → o: 「しろまい」（知るまい）
- ・ e → a: 「こらほどの」（これほどの）
- ・ e → i: 「神がおもてい」（助詞「へ」の訛り）、「ごもくさい」（助詞「さへ」の訛り）
- ・ o → a: 「はびかる」（蔓る）
- ・ o → u: 「どむならん」（どうもならん）、「まむり」（守り）

## 〈母音と子音〉

- ・ a → ya: 「しやはせ」（幸せ）
- ・ u → yu: 「そのゆへ」（その上）
- ・ u → mu: 「むまれ」（産まれ）
- ・ e → ya: 「かやし」（返し）
- ・ e → yo: 「かべひとよ」（壁一重）
- ・ yu → i: 「いがみ」（歪み）

## 〈子音相互間〉

- ・ shi → syu: 「たのしゆみ」（楽しみ）
- ・ hi → shi: 「しかゑ」（控へ）、「しながた」（雛形）
- ・ shi → ri: 「いきどふり」（生通し）、「くだり」（下し・下痢）
- ・ zo → do: 「どうど」（どうぞ）、「いづむど」（いづむぞ）
- ・ do → zo: 「なぞ」（など）

付言すると、これらの方言的な音韻変化は、今日確認できるものも多数ある。たとえば、奈良県五條市にある私の所属教会周辺の高齢者から「なんでそんなことするんど」（なぜそんなことをするのか）などと言われたりするが、最後の「ど」は「zo → do」変化であろう。ただし、たとえば、「いきどふり」などは「通り」という語があるために方言的とは言い切れない感もある。

## ②韻律調節上の音節転換

## 〈約音〉

- ・ ウ音便の省略よりくる約音: 「つこて」（使って→つこうて）、「まちごた」（間違った→まちごうた）
- ・ 形容詞の連体形における約音: 「いそがし事」（忙しい事）、「むつかし事」（難しい事）

- ・ 助動詞「う」の省略: 「はやくつけよと」（つけようよ）、「はなししよもの」（はなししようもの）
- ・ 母音を同じくする助詞の省略: 「をもて（へ）でよふと」（te-e-de）、「しゅご（を）をしへかけ」（go-o-oshie）
- ・ 漢字音の省略より来る約音: 「はふそせんよの」（様）、「はつめ」（発明）、「よい」（容易）

## 〈延音〉

- ・ 母音によってする延音: 「木い」「たあには」「せかいぢうう」
- ・ 文語的表現よりする延音: 「いかなる」「しりたる」
- ・ 動詞の特殊活用形による延音: 「きかする」「いさむる」
- ・ 特殊の複合助詞による延音: 「これさいか」「たいないよりも」「天よりに」

その他、「国語学」によれば、例外的に、表記上音律が整わない例も見出される。たとえば、「にちへに心つくしたその（ウ）ゑは」（一号67）の「ウ」や、「こがなくでな（イ）神のくときや」（三号29）の「イ」は脱字（補入漏れ）とされる。また、「なにゆへなると」、「ものやどて」、「しかとみでいよ」など、濁点の転倒もしくは余分と思われる箇所が見られることも指摘されている。

このように「おふでさき」では、さまざまな語において音を延ばしたり縮めたりして（音節の増減によって）音律を調整しており、例外を除けば、大部分が和歌のリズム通りに表記されている。このことは、「おふでさき」が語句の意味内容もさることながら、その伝え方にも特別な関心を払っていることを示している。

さて、前回は「表記法」、今回は「音韻」について記したが、今日われわれが「おふでさき」のこうした言語的な特徴について学ぶ意義について少し述べたい。第一に、教祖直筆の「おふでさき」においては、方言（そして本連載では取りあげないが変体仮名）を学ぶことによって、中山みきという個別の身体をともなった教祖に近づくことができる。それは、その身体に宿った言葉づかいや筆跡を通して現れる教祖を意味する。つまり、「おふでさき」の言葉は、今日では拝することのできない教祖のお姿の延長なのである。

第二に、和歌形式で読むことによっても、やはり教祖と個として出会うことができる。というのも、後述するように、和歌においては語句の意味の把握の大部分は読み手の感覚的な個性に委ねられ、読み手もまた「個としての自分」となる。つまり、「おふでさき」は万人に開かれつつも、読み手と教祖の個人的な意思疎通を促しているといえよう。

そして第三に、より実践的には、「おふでさき」に関するこうした細かな知識は、日本語を学習する海外の信仰者が「おふでさき」を原語で読むための重要な段階となろう。たとえば、平仮名で「たのしみ」と学ぶだけでは「たのしゆみ」は読めない。海外の方でも原語で読めるならば、翻訳上の意味解釈のズレも大きく解消される。各国の言語への翻訳と同時に、意欲ある海外信仰者が原語で読めるように整備することも重要であろう。